
お盆の川

愚者

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

お盆の川

【Nコード】

N1549F

【作者名】

愚者

【あらすじ】

8月15日、日本では盆と呼ばれ、年に一度向こう側へ行つたものたちが帰ってくるらしい。だから、先祖の墓に行き、霊を鎮めるそうだ。私の家もそうで、毎年父の実家へ帰省する。そのときの話。

(前書き)

時期はズレましたが、冷やりとドウゾ♪

「涼ねえちゃん、川行こうよー」

あたしの名前が呼ばれ、ショートパンツのすそが引っ張られる。
下を見れば親戚の由羅ちゃん。

今年小学校最終学年らしく、顔立ちが整ってきて、少女らしく可愛い。

彼女の右手にはプールバック。

「うん、暑いから行こっか！」

私は荷物から水着を出し、お風呂場で着替える。

クラスの何人かは水着を買ってたけど、あたしはスクール水着。
別に一部の人を狙ってるわけではなく、そういう水着を着るほどのスタイルじゃないだけ。

着替え終わって、上からワンピースを着る。

川原まではこの格好で行くから。

「ねえねえ！和磨がもう少しで帰ってくるからつれて行こっ」

和磨は由羅の弟で、小学4年生。

あたしたちがな仲がいいのは三人ともバスケットボールをやっているから。

だからよく電話でその話をする。

「分かった、じゃあ、トマト貰ってくる、水で冷やしたら美味しいでしょ？」

「おねえちゃんナイス！」

その後は二人でおばあちゃんにトマトを3つ貰い。
部活から帰ってきた和磨と川へ行った。

「ねーちゃん、お先にー！」

ワンピースを脱いでると、後ろから声がした。
ドボンッ

大きな音の後に

「冷てーッ」

和磨のはしゃいだ声

あたしたちはそのまま日が暮れるまで遊び、途中で冷やしたトマトを食べた。

「そろそろ、帰ろうか」

和磨が欠伸をしながら言う。

時計を見ると4時。

まだ周りは明るいけど、時間は結構たっていた。

「そうだね、暗くなる前に」

そういつて、由羅といっしょにタオルで身体を拭く。

草むらで由羅と交代で見張りをしながら着替えた。

「あ、ゴーグル」

和磨の指差す方を見ると、ゴーグルがゆっくりと川を流れていた。

「仕方ないね、取ってくる」

あたしはゆっくりと川に入って行く。

すると・・・

「きゃッ」

コケが生えてたんだと思う、石に足が滑った。

「ねーちゃんッ！」

和磨が呼ぶ

「大丈夫、転んだだけ」

あたしが笑うと

「違う、前ッ！」

和磨が真っ青な顔であたしの前を指差す。

「前？」

振り向くと

「きゃッ」

何か見る前に右足がつかまれるように川の深いところへ運ばれていく。

「な、何ッ」

大きな声を上げたいのに、口に川の水が入り込む。

「――！――！――ッ！」

和磨や由羅が何か叫んでるのに、聞こえない

だんだん、見えなくなってきた。水の中に入ったから。

（いったい、なんなの！？）

右足をアタシは見てしまった。

（！？）

そこには真っ黒な人影、その左手があたしの右足を掴んでいた。驚いた拍子に、口の中の空気が漏れる。

自由な左足であれを蹴ると、右足も自由になった。

急いで水面に上がり、息を目一杯吸う。

「ねーちゃんッ」

和磨がこちらに来ようとする

「こないで！、巻き込まれるよ！何かひつもを取って

と言いたかったけど、水に引き込まれた。

「ねーちゃん！」

和磨が叫ぶけど、黒いのはアタシを引っ張るのをやめない。

そのまま、あたしは川底に引きずられていった。

少なくとも、意識の最後はそこで切れてる。

目を覚ますと、

「あ、涼ねえちゃん起きた？」

アタシは布団に寝かされ、服も寝巻きに変わっていた。額には絞ったタオルもある。

「・・・何で？」

何故布団で寝てるのか、あの黒いのはどうなったか、色々とわからなかった。

「あの黒いのは、俺が塩のビンを投げたら呻きながら消えたよ」

塩?・・・幽霊だもんね。

「そのあと、急いでじいちゃん呼んで、運んでもらった。お医者さんにも見てもらった」

「顔に川の水掛ければいいのに。ありがとう」

あたしは右手で和磨の頭を撫でる。彼の目には涙が溢れていた。

「由羅は?」

和磨の隣にはいない。

「先に寝てる、今12時だから。交代した」

交代で見てくれたんだろう。タオルはまだ冷たかった。

「ありがとね」

この後、おじいちゃんが来て、和磨は寝る事になり、あたしも寝るように言われた。

次の日、あたしたちはおばあちゃんに呼ばれた。

「あんたら、ちょっと座んなさい」

いつもの、説教をする時の台詞だ。

「お盆の川にゃ入っちゃいけないのよ!

先祖から悪霊から何からがあっち側と、こっち側を行き来する時期なんだからね!」

川でおぼれるまではきつとあたしたちは笑っていたと思う。

「お前らみたいな子供は肉が柔らかいからの、帰りのお弁当代わりに連れてかれるぞ」

「ばあさん、肉が柔らかいとか、セクハラかの?」

「じいさんは笑いをとりなさんな!あたしやもう少しで孫をみな失うところじゃったんじゃ!」

「怒りなさんな、今が無事ならそつとしときなさいな、この子らも当分は川に行かんじやろ」

おばあちゃんお声は次第に弱くなっていた、きつと泣くのをこらえてる。

「おばあちゃん、ごめん。あたしらもうお盆に川に行かないから」

「ごめん」

「ごめんなさい」

あたしらはほとんど同時に謝った。

「わかりやええんじゃ」

おじいちゃんがあたしの頭を撫でる。

「約束じゃよ」

おばあちゃんが由羅と和磨を抱きしめる。

それ以来、あたしらはお盆の前後は、川に行かなくなった。
気のせいだろうけど、

「わしらは、いつでも連れて行くからな？」

と、川がいつてるような気がしたから・・・

（後書き）

ま、ほんの少しくらいヒヤツとしてくれたのなら、十分です
W

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1549f/>

お盆の川

2010年11月24日05時33分発行